

いのち  
生命のにぎわいとつながり

No.55

平成29年10月

10月も後半に入り、生命のにぎわい調査団員の皆さんからもモズの高鳴きやイチヨウの黄葉の報告が寄せられるようになりました。また、これからの季節は、カモなどの鳥類も多く見られるようになり、バードウォッチングを楽しむ機会も増えます。

本号では、千葉県の淡水域に生息するカメ類について紹介するとともに、生物多様性に関する市町村職員研修会の開催結果や生物多様性巡回展の開催状況などについても報告します。

## 千葉県に生息する淡水性カメ類



ニホンイシガメ（千葉県レッドデータブック：最重要保護生物A）

カメは、歌川広重や歌川国芳の浮世絵にも描かれるなど、古くから人々に親しまれてきました。皆さんは、そんなカメについてどの程度御存知ですか？誰でもピンとくるカメの特徴といえば甲羅ですが、それ以外にも、陸上での動きが意外と素早かったり、成長する際に甲羅の表面が剥がれる(脱皮する)種類がいたり、産卵巣の温度で性別が決まる(温度依存性決定)など、意外と知られていない生態がたくさんあります。

カメが生息する環境は様々ですが、大別するとウミガメの仲間が海洋に、リクガメやヤマガメの仲間が陸上に、そしてイシガメやヌマガメ、スッポンの仲間などが淡水域に生息しています。

### CONTENTS

1 千葉県に生息する淡水性カメ類	1
2 生物多様性に関する市町村職員研修会を開催しました	3
3 生物多様性の巡回展を開催しました	4
4 千葉県の希少種（トラツグミ）	4

千葉県には、現在も自然状態の河川や池沼、水田など淡水性のカメ類にとって好適な環境が多く残されています。今回は比較的目にする機会が多い、淡水性カメ類5種について、形態の特徴や生態を紹介いたします。

**ニホンイシガメ (イシガメ科イシガメ属) ㊦**

日本固有種で、関東地方以南の本州、四国、九州だけでなく、種子島や佐渡島などの島嶼にも分布しています。県内では主に房総丘陵以南の河川の上流域や山間の池沼・湿地などに生息していますが、県北部の生息地はごく一部に限られています。背中側の甲羅(背甲)は、黄土色や黄褐色で平たく、後縁はギザギザになっています。主に水中で活動していると考えられてきましたが、近年、陸上の落ちた果実を食べたり、水域周辺の斜面林を休息場所に利用したりと、頻繁に上陸することが分かってきました。

過去の研究では、千葉県は関東地方で最もニホンイシガメの生息数が多いとされており、かつては一般的に見られる種でした。しかし、河川の護岸化、水質汚染など生息環境の悪化、アライグマによる捕食、販売目的による乱獲、後述するクサガメとの種間交雑による雑種の増加などの要因から、近年急激に生息数が減少しています。そのため、環境省レッドリスト(2014年版)では準絶滅危惧種、千葉県レッドデータブック(動物編・2011年改訂版)では最重要保護生物に選定されています。また、生物の国際取引を規制するワシントン条約では付属書Ⅱに記載され、甲長8cm以上の野生個体は国外への輸出が禁止されています。

**クサガメ (イシガメ科イシガメ属) ㊦**

水田地帯において最も一般的に見られる種ですが、河川や湖沼などにも生息しています。体色は茶褐色で、頭部と側頭部に黒い縁取りのある黄色いストライプや斑紋があります。成熟したオス個体は全ての模様消失し、全体が真っ黒になります(黒化)。泥に潜る習性があり、泥が堆積した水田やその周辺水路などでは高密度で生息していることがあります。

以前は在来種とされていましたが、国内での化石

の発見例や江戸時代中期以前の本種に関する確実な記録がないこと、江戸時代や明治時代には希少で西日本にのみ分布するという記述があることから、江戸時代以降に中国や朝鮮半島から持ち込まれた外来種であることが最近の遺伝子解析の結果からも示唆されています。



左：クサガメ 右：ニホンイシガメ×クサガメの交雑種

**ミシシippアカミミガメ(ヌマガメ科アカミミガメ属) ㊦**

アメリカ合衆国南部からメキシコ北東部が原産の外来種ですが、県内各地の河川の中・下流域や平地の池沼に生息しており、公園の池では最も普通に見られる種類になってしまっています。背甲は緑褐色で黄色、黒、緑色などの模様が入りますが、成長とともに消失します。側頭部には鮮やかな赤い斑紋が耳のように見えるのでアカミミガメと呼ばれていますが、赤い斑紋がある部分に耳はありません。

オスは成熟すると前肢の爪が伸長し、メスへの交配に使います。甲長20cm近くまで成長したオスは、背甲や皮膚が暗褐色になり、斑紋が消失しますが、完全に黒くなることはありません。

かつて甲長3cm程度の幼体が「ミドリガメ」として年間100万個体以上輸入され、安価で販売されていました。しかし、成長が速く大きくなると気性が荒くなるため、多くの個体が捨てられて野生化・繁殖し、全国的に問題となっています。近年では、徳島県などでレンコンの新芽が食べられるなどの被害が報告されています。



◀ミシシippアカミミガメ

表 各種の特徴(大きさ、食性、産卵生態)

区分	甲長 (cm)		食性	産卵期	年間の産卵回数	1回の産卵数	卵の形
	オス	メス					
ニホンイシガメ	14	20	雑食(魚類、甲殻類、水生昆虫、水草、果実など)	6~7月	1~3	1~12	楕円形
クサガメ	18	25	雑食(魚類、甲殻類、貝類、水生昆虫、水草など)	6~8月	1~3	2~11	楕円形
ミシシippアカミミガメ	20	28	雑食(魚類、甲殻類、貝類、水生昆虫、水草など) ※幼体は肉食傾向、成体は草食傾向が強い	5~7月	2~3	2~22	楕円形
カミツキガメ	40	35	雑食(魚類、甲殻類、水生昆虫、水草など)	5月下旬~6月中旬	1	20~40(最高100)	球形
ニホンスッポン	35		肉食(魚類、貝類、甲殻類、水生昆虫など)	6~8月	3~4	10~40	球形

**カミツキガメ (カミツキガメ科カミツキガメ属) ㊦**

原産地は北米から中南米です。国内に侵入しているのは亜種ホクベカミツキガメといわれています。県内外で遺棄されたと思われる個体が見つかっており、印旛沼流域では平成27年度に推計した結果、16,000頭以上が生息していると推定されています。

主に流れの緩やかな河川や水路、池沼に生息しています。夜行性で日光浴をすることはほとんどなく、普段は泥の中に潜っていますが、繁殖期などには陸上を移動することもあります。腹側の甲羅（腹甲）は十字型でとても小さく、頭部、四肢、尾を甲羅の中にしまうことができません。県内では甲長40cm近い大型の個体が捕獲されています。

20年ほど前には甲長4cm程度の幼体が販売されていましたが、数年で甲長20cm以上に成長し、性格も狂暴であるため、飼いきれなくなった個体が遺棄され、野外で繁殖するようになってしまいました。人に危害をもたらすおそれがあることから、平成17年に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」により特定外来生物に指定され、飼育や生きたままの運搬、保管や販売などが禁止されました。千葉県では「カミツキガメ防除実施計画」を策定し、根絶に向けて防除を実施しています。



左：カミツキガメ 右：ニホンスッポン

**ニホンスッポン (スッポン科スッポン属) ㊦**

主に河川の中・下流域や平地の湖沼などで砂泥質の場所に生息しています。古くから食用として養殖され、市場にも流通しています。甲羅は扁平で、他のカメとは異なり、柔らかい皮膚で覆われています。日光浴は頻繁に行いますが、陸上を移動することはほとんどありません。県内の詳細な生息地や地域個体群の特性には不明な点が多く、養殖由来の個体が含まれている可能性もあります。在来種かどうかを判断するには、遺伝子解析を含めた、より詳細な調査が必要です。

県内ではこのほか、ミナミイシガメ、ハナガメ、ワニガメなど、様々な外来種が野外で見つかっています。これらはペットとして飼われていたものが捨てられたり、逃げ出したりしたものだと考えられます。クサガメで50年以上生きた記録があるなど、カメはとても長生きする生物です。飼育を始める際は、よく考えた上で、最期まで責任を持って飼育しましょう。

(今津 健志 千葉県生物多様性センター)

**生物多様性に関する市町村職員研修会を開催しました**

生物多様性に関する市町村職員研修会を平成29年8月8日(火)に県立中央博物館で開催し、生物多様性を担当する多くの市町村職員の皆様に御参加いただきました。

本研修は、街づくりの主体である市町村職員の方々に、生物多様性への関わりについて理解を深めていただくことを目的に毎年開催しています。



聴講する研修会参加者

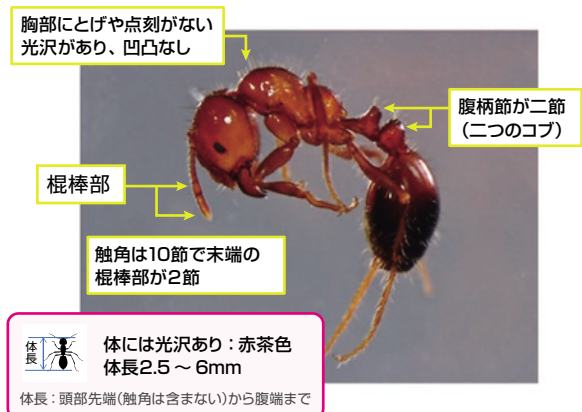
今年度は、県生物多様性センターから「生物多様性の保全・再生と市町村の関わり」について説明しました。また、今年の5月に初めて日本への侵入が確認され、メディア等で大きく取り上げられた特定外来生物のヒアリについての研修も併せて実施しました。

ヒアリに関する全国の状況（千葉県では未発見）と県民の皆様からの通報への対応について説明した後、県立中央博物館の昆虫を専門とする倉西良一主任上席研究員から「ヒアリ問題とヒアリの識別について」と題して講演していただきました。併せて、ヒアリの実物標本を用いた顕微鏡下での識別作業の実習も行いました。

参加者は実際の通報等への対応に備えるため、熱心な議論を行っていました。

(阿津 拳翔 千葉県自然保護課)

**◎ヒアリの特徴**



写真・解説：千葉県立中央博物館 倉西良一／標本 台湾産 (坂本洋典氏提供)

## 生物多様性の 巡回展を開催しました

生物多様性センターでは、生物多様性の普及啓発のために市町村で開催される環境フェア等に積極的に参加して、パネル展示等による巡回展を行っています。

特に、「環境月間」の6月と秋季には、多くの市町村で環境にまつわるイベントが開催されます。今年の環境月間では、市川市（4日）、船橋市（10・11日）、印西市（10日）、谷津干潟（11日）、千葉市（14日）、浦安市（25日）の6か所に出展し、多くの来場者に生物多様性について学ぶ機会を持っていただくために、パネルの解説と生命（いのち）のにぎわいクイズを実施し、クイズの参加者には記念品として、特製の生きもの缶バッジを差し上げました。また、船橋市（6月1日～9日）及び鎌ヶ谷市（12日～23日）では、市役所のロビーを会場とする環境パネル展にも参加・展示しました。



いちかわ環境・防災フェアへの出展

秋季の出展としては、八千代市（9月21日～29日・展示のみ）、市原市（9月23日）、エコメッセ（10月9日）、印旛沼流域環境・体験フェア（10月28日）に出展しました。今後は、県立中央博物館自然誌フェスタと長南町（11月3日）、富里市（11月19日）、柏市（12月2日）への出展を予定しています。概要については、千葉県生物多様性センターのホームページ[http://www.bdcchiba.jp/event/event\\_index.html#L1](http://www.bdcchiba.jp/event/event_index.html#L1)でお知らせしていますので、ぜひお立ち寄りください。

（酒井 さと子 千葉県生物多様性センター）



クイズ参加者に差し上げている缶バッジ

## 千葉県の希少種

### トラツグミ

（千葉県レッドデータブック：最重要保護生物A）



トラツグミは、その名の通りトラのような縞模様が特徴的なツグミの仲間です。冬には各地で見られ、雑木林がある公園など身近な場所でも観察することができます。地面を歩き回りながら体を上下にゆすり、頭を下げてちょこちょこ歩く姿は愛嬌があります。しかし、地上で採食するためノネコなどに捕食されてしまう事例が確認されています。また、房総丘陵では繁殖個体群が確認されていますが、その数は少なく、ノイヌ、ノネコ、アライグマなどの侵入で危険にさらされていると言われています。

最近では、写真撮影のために過度に追いかけられたり、餌付けされたりするなど、人為的攪乱が生じています。疲労が蓄積したり、警戒心が低下することにより、天敵に捕食されやすくなる弊害を生じさせてしまっています。

トラツグミは、繁殖期の夜に「ヒー、ヒョー」と口笛のような声で鳴き交わします。夜中の真っ暗な山の中から響いてくるこの声は、人々の恐怖心をあおり、平家物語で源頼政が退治した妖怪「鵺（ぬえ）」の声とされました。また、万葉集では「よしゑやし 直ならずとも ぬえ鳥の うら泣き居りと 告げむ子もがも（柿本人麻呂）」と詠まれ、片想いの切なさを表す悲しい声とも表現されています。聞き手によってまったく違うイメージが作られるトラツグミの声は、1970年代にはUFOの着陸音として、ある大学では夜中に口笛を吹きながら寮の周囲を歩き回る不審者として警察が出動したこともあったそうです。

この声を聴く機会がありましたら、少しの間、目を閉じてじっくり聴いてみましょう。あなたにはどのような声に聴こえるでしょうか？

（中込 哲 生命のにぎわい調査団員 a0512）



生物多様性ちばニュースレター No.55 平成29年10月31日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp>